

その治療法は  
本当に  
効くのか

行って、見て、聞いた

連載第四回

伊藤隼也

医療ジャーナリスト写真家

# 頭痛外来

「頭痛の放物乱用頭痛」  
頭痛薬の乱用は頭痛を慢性化する。  
「片頭痛や群発頭痛」という診断はあり得ない。  
片頭痛や群発頭痛と診断されたら、血液検査を行う。  
帯状疱疹ウイルスが関係している場合もある。

頭痛は、人類が太古の昔から付き合ってきた身近な病気だ。多くのストレスや慢性疾患を抱える多忙な現代人は、よほど我慢できない頭痛以外は市販の痛み止めを済ませてしまうことが多いだろう。

頭痛には、片頭痛・群発頭痛・緊張型頭痛の3つに分かれる慢性頭痛と、脳や体の病気による二次性頭痛がある。

いつもと違う、我慢できない痛みが続くようなら、すぐに専門家の診断を受けたほうがいい。脳腫瘍やくも膜下出血などが原因で起こる二次性頭痛なら、命を落とすことにもなりかねない。日常的な頭痛でも「痛み止めを飲めば治るから」と、市販の鎮痛薬を多用するのは危険だ。脳がかえって痛み

に敏感になり、「薬物乱用頭痛」を引き起こす可能性がある。

最近では、画期的新薬の「トリプタン系薬剤」の自己注射も可能になり、片頭痛や群発頭痛に悩む多くの患者が救われるようになった。一方で、よい医師や治療法に出会えず、あちこちの病院を渡り歩く「頭痛難民」と呼ばれる患者も登場している。今回は、その頭痛難民にとって救世主のような医

(左)入念な問診のあと、必要ならMRI検査を受ける。(右)清水医師が診察している患者を救った。



こうした患者たちの期待を一身に受けるのは、週に3度、このクリニックで頭痛外来を担当する清水俊彦医師である。現在、5つの医療機関で診療をしており、この日に診察した患者の数は、約220人。1週間でのべ1500人も患者を診ているという。ここまで多忙になると、予約を

師がいると聞き、さっそく治療現場に向かった。  
訪れたのは、東京・汐留にある汐留シテイセンター。トラクルリニック。まず院内を見渡して驚いた。待合室にあふれかえる人、人……。制服姿の女子高生からお年寄りまで、その数、ざっと50人。その様子は「行列のできる頭痛外来」といったところ

制限せざるを得ない。初診患者は一日に20人だけ。スクリーニングに時間をかけるためだ。必ず問診とCT(コンピュータ断層撮影)を行い、ときにはMRI(磁気共鳴画像化装置)も使って徹底的に診断する。

「鼻や甲状腺の異常も必ずチェックします。花粉症や虫歯一本さえ、慢性頭痛の痛みをひどくしてしまうんですよ。そうした病気があると、いい薬を使っても、キレが悪いのです。慢性頭痛と似た症状の病気をしっかり見分けることも大切です」(清水医師)

片頭痛や群発頭痛と診断された患者には、血液検査を行う。「頭痛に血液検査？」と不思議な気もするが、清水医師はこれらの頭痛に水疱瘡の原因として知られる



「帯状疱疹ウイルス」が関係している」と唱えている。めまいや耳鳴り、突発性難聴なども、このウイルスによるとみられるものがあるという。この説は07年にスウェーデンで開かれた国際頭痛学会で発表され、大きな反響を呼んだ。

清水医師の経験上、季節的に現れる群発頭痛の8割は帯状疱疹ウイルスが関係しているというから驚きである。  
「ウイルスに注目したきつかけは、群発頭痛で痛み側の額やまぶたに帯状疱疹を起こしていた患者さんを何人も診たことでした。予防薬として使ったステロイド剤の飲み薬の副作用で免疫力が落ち、帯状疱疹ウイルスが暴れ出したのだらうと考えました。同時に頭痛と同じ側ということも、頭痛自体にもウイルスが関係しているかもしれないと思っただけです」(清水医師)

抗ウイルス薬「バルトレックス」を見切り発車で使う。薬が効きやすい「ゴールデンアワー」は、発症から数週間。高い効果を得るためには、これを逃さないことが重要なのだ。患者にも早めの受診が求められる。  
バルトレックスによる治療を受けたAさん(32歳・男性)に話を聞いた。18歳で突然左目の奥に刺されるような痛みを感じたAさんは、20歳のときに大病院で群発頭痛と診断されたが、当時はまだ有効な治療法がなかった。いったん発作が起ると、激しい

痛みで眠ることさえできず、仕事も辞めざるを得ない状況に。その後、トリプタン系薬剤も試したが、発作を根絶するには至らない。ところが1年ほど前、清水医師のもとでバルトレックスを飲んでみたところ、10年以上も悩まされ続けた発作が起らなくなった。  
「再就職先では安心して働くことができるようになり、人生が変わりましたね」  
再発が不安な季節の変わり目を前にクリニックを訪れたというAさんは、明るい表情で話す。

清水医師は、アロディニア(片頭痛の前兆で現れる皮膚の違和感)と帯状疱疹ウイルスの相関関係をすでに明らかにしている。現在は厚生労働省から研究費の助成を受け、DNAレベルでの検証を進めているとのこと。しかも、バルトレックスによる治療は、副作用などのデメリットがほとんどないという。現状でも、多くの医療機関で積極的に用いられてよいのではな

いか。そうすればAさんのような例がもっと増えるに違いない。頭痛の治療は奥が深い。頭痛治療のスタンダード「片頭痛と緊張型頭痛を間違えなければいい」だけでは患者は救われない。最先端の頭痛外来の条件は、薄皮を一枚ずつはがすようにほかの病気の可能性を取り除き、頭痛本来の姿をきちんと見極める、たしかに眼を持つていることだ。

## 今週取材した医師・病院

汐留シテイセンター  
セントラルクリニック  
脳神経外科 神経内科  
清水俊彦 医師  
住所/東京都港区  
東新橋1-5-2  
汐留シテイセンター3F  
電話/03-5568-8700

## このほかに「頭痛外来」のある病院

市立横手病院  
脳神経内科  
住所/秋田県横手市  
根岸町5-31  
電話/0182-32-5001

丸本眼科  
住所/神奈川県横浜市  
泉区和泉町5732-9  
光南ビル1F  
電話/045-801-0082

東京女子医科大学病院  
脳神経外科  
住所/東京都新宿区  
河田町8-1  
電話/03-3353-8111

新須磨病院  
脳神経外科  
住所/兵庫県神戸市  
須磨区磯崎町4-1-6  
電話/078-735-0001

中尾クリニック  
脳神経外科  
住所/兵庫県神戸市  
東灘区住吉町3-8-3  
電話/078-856-0234